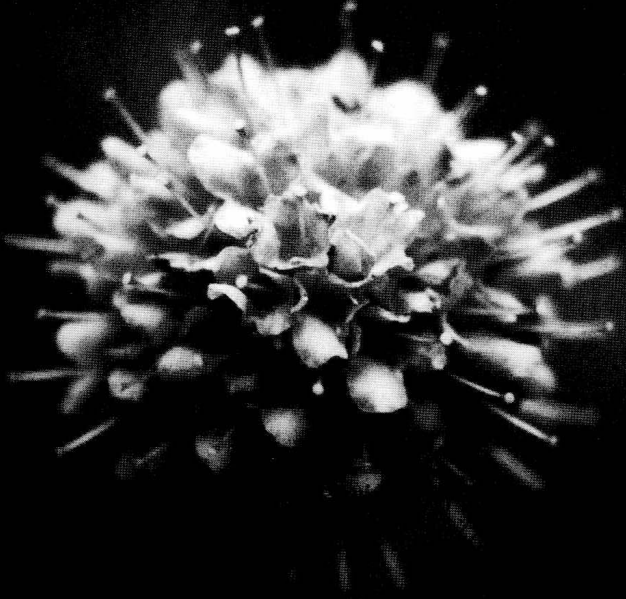


推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1990



of Japan 1990



1990=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社



1990年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集

定価1800円(本体1748円)

1990年 5月18日 第1刷発行

編 者 日本推理作家協会

発行者 野 間 佐 和 子

発行所 株式会社 講談社

東 京 都 文 京 区 音 羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(945)1111

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1990 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-114532-0 (文2)

1990年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序	・ ・ ・ ・ ・	生島治郎	5
茶色い部屋の謎	・ ・ ・ ・ ・	清水義範	9
北斎の罪	・ ・ ・ ・ ・	高橋克彦	33
サボテンの花	・ ・ ・ ・ ・	宮部みゆき	59
人形と暮らす女	・ ・ ・ ・ ・	山崎洋子	79
泣かない女	・ ・ ・ ・ ・	小池真理子	105
手話法廷	・ ・ ・ ・ ・	小杉健治	131
好きなように	・ ・ ・ ・ ・	佐野 洋	161
ある騎士の物語	・ ・ ・ ・ ・	島田荘司	179
玄界灘の殺人	・ ・ ・ ・ ・	中津文彦	217

序

日本推理作家協会理事長

生島治郎

本書は、一九九〇年版の推理作家協会編纂による『推理小説代表作選集』であります。くだいて申し上げれば、昨年発表された推理小説の短篇の中から、十四篇を選んだ短篇集です。

ご存知のように、現在もミステリ・ブームはつづいており、年間に発表される短篇は無数と云ってもいいほどの多さにのぼります。

それらの短篇群を、郷原宏、新保博久、多田兼成、中村利夫、林邦夫、原田裕、山前謙の七氏選考委員が丹念に眼を通して、選んでくれたのがこの十四篇なのです。

推理小説の短篇は、長さの制約のある分だけ、長篇より、テクニクの冴えが必要だと云っていいでしょう。

海外でも、アガサ・クリステイやエラリー・クイーンのような本格長篇派の大家には、見るべき作品が少なく、むしろ、短篇巧者のロアルド・ダール、スタンリー・エリン、ヘンリー・スレッサー、リチャード・ボモントのような奇妙な味を得意とする作家の作品に

切れ味鋭い作品が多いのも、このことを暗示しているようです。

日本でも、今後はテクニクの切れ味鋭い、意外性たつぷりの短篇が続々とあらわれるにちがいないし、それを楽しみ得る眼の肥えたミステリ・ファンが増えるであろうと私は期待しております。

平成二年四月六日

1990年版推理小說年鑑
推理小說代表作選集

茶色い部屋の謎

清水義範

読者への挑戦

ここまでお読みになった読者には、もうこの殺人事件の犯人がおわかりであろう。ここまでで推理に必要な材料はすべて提出されている。あとは諸君の知恵と想像力の働きのにより、唯一この人物のみが犯人たりえると指摘するばかりなのである。

お詫び……当方の手違いにより、不適切な箇所に「読者への挑戦」が出てきたことをお詫びします。

I

奇妙なパーティーに呼ばれてしまったものだ、と神童天才は思っていた。今夜この屋敷に集められた人々と、彼は一面識もない。それどころか、招いてくれたこの家の主人と

だって、過去に三度ほど会ったことがあるだけである。

神童天才は、物書きである。小説家ではない。職業を記載する必要がある時はフリーライターと書いているが、より正確に言うならあまり有名ではない理科系コラムニストということになるうか。雑誌にページをもらって、『エルニーニョと東海大地震』とか、『DNAとピサの斜塔』なんていうおもしろコラムを書いている。その他、生活のためにむこうの科学書を、大学教授に代って下訳したりもしている。つまりまあ、貧乏な科学解説屋というところだ。三十歳で独身。

その神童のことを、作家であると勘違いしたのが、今日自宅で催されるパーティーに招待してくれた八田虎造だった。

八田虎造はもと八田興産、今は社名を変えて、ハタタリースという一流企業の社長で、庶民から見ればうらやましくて腹が立つてくるような大きな邸宅に住んでいた。ギラギラと脂ぎった顔をした五十歳の八田虎造は、業界ではケチなことでも有名で、陰では欲八田と呼ばれている。欲張った、とかけてあるのであろう。

そのケチが、なぜそう親しくもない神童を自宅のパーティーへ呼んだのか。神童は生活のためのアルバイトとして、ハタタリースのPR誌に原稿を書く仕事をしたことがあ

り、その時、社長インタビューをした、というだけの縁しかなかったのである。

神童が招かれた理由は、彼が物書きだからであつた。つまり、その夜のパーティは八田虎造の唯一の趣味を満足させるために、かなり金をかけて企画されたものであり、こんなに金をかけたんだからどこか雑誌にでも紹介してもらいたい、と虎造は思つたわけだ。そうしたら、神童が雑誌にコラムを持つているという。こいつはいい、と、お門違いの科学解説屋を招待したわけである。

神童天才がその広大な屋敷に到着すると、お手伝いらしい女性が、ホールへ案内してくれた。そこにはもう、先着の客たちが何人かいて、ある者は部屋の隅の椅子にすわり、ある者は立つて二、三人で談笑していたりした。

知つた顔の人は一人もない神童が所在なさに立ちつくしてしていると、体の大きな、顎鬚をたくわえた男が近寄つてきて言つた。

「いらつしやいませ。私、八田の長男で熊男といひます」

「あ、どうも、私は神童天才です」

「ああ、作家の神童先生ですね。父からうかがつています。今夜のパーティのことをぜひどこかに書いてやつて下さい。それが父の望みなんですから」

「はあ」

作家ではない神童としては、そんな曖昧な返事をするしかなかった。

「なにしろ、今夜のゲストは錚々たる顔ぶれですからね」

「ええ」

と答えて、神童はホールの客たちを見る。どこが錚々なんだ、と言いたくなるような、見るからに変人そうな客ばかりである。そしてその客たちの間を、三人の女性がホステスよろしく酒を配つたりしてサービスしていた。虎造には娘が二人あるそうだから、それと、もう一人は多分長男の熊男の夫人であらう。

神童が何か言おうとした時、別の客が現れて熊男はそつちへ寄つて行つた。神童は一人残されて、もう一度客たちを見た。

これが本当に名探偵なのだろうか、と思う。

そうなのである。今夜のパーティに招待されているのは、我こそは名探偵と、余人はともかく自分では思つていゝ人間ばかりなのである。

八田虎造の趣味とは、名探偵好み、というものであつた。小説の中に出てくるような名探偵が大好きで、そういう名探偵と親しくつきあいたい、と念願しているのである。

その夜のパーティは、虎造のその趣味を満足させるべく

企画された、名探偵総登場パーティなのであった。招かれた客は、神童のような例外を除いて、いずれも我こそはという名探偵なのである。

ただ、小説の中でならともかく、現実にはあまり名探偵が活躍した話をきいたことがない。ある探偵の推理によって、警察も手を焼いていた事件が見事に解決された、というような事例は、あまり耳にしない。

とすると、ここに集まった名探偵は一体どこでどんな活躍をしていると言うのだろう、という疑問は当然生ずるのであるが。

そんなことを考えていた神童に、近寄って声をかけた人物がいた。

「失礼ですが、サイエンス・コラムニストの神童天才さんじゃないですか」

そう言ったのは、白毛が混じって髪が灰色になった、四十歳ぐらいの精悍な顔つきの紳士であった。

2

「そうです」

「やつぱりそうですか。いやあ、実を言うとこんな小さな写真でお顔を見たことがあるだけなので、違うかなとも思

ったんですが」

そう言って男は空中の小豆をつまむような手つきをした。

神童としては、自分のような者のことを、知っている人がいることが驚きである。それも、正しく職業を理解してくれている。

「私、神童さんのコラムのファンなんです。いやあ、実に科学のことが面白くよくわかります」

「あの……」

「あ、失礼しました。私はこういう者です」

男は名刺をくれた。その肩書きを見て神童は目をパチクリさせる。

「警視庁の、警部さん、なんですか」

「そう。大野木といいます。よろしく」

その人は、名探偵ではなく、現職の刑事であった。しかし、刑事がどうして名もないサイエンス・コラムニストなんかを知っているのだろう。科学が好きな刑事なんているんだろうか。

そして、刑事がどうしてこんなパーティに呼ばれているんだろう。

大野木警部は、神童の後のほうの疑問に答えた。

「以前ちよっとした縁で、八田氏と知りあいましたね。そ

うしたらこのパーティに招待してくれたんです。多分、名探偵たちの色どりに、ほんくら刑事が混じるのも面白いと思っただけでしょうな」

「はあ」

「神童さんはどうしてここへ。この集りはあまり科学的とも思えません」

神童は八田虎造の誤解について説明した。

「そういうことですか。じゃあ、今夜集った客のこともよくご存知ないんですね。私の知っていることをお教えしましょう」

そう言つて大野木は、ホールの中を見渡した。

「まず主催者側からいきますとね、洋装の若い女性が二人いますね。あれが八田氏の二人の娘で、駒子と兎子です。そして、着物を着ているのが、長男の熊男の妻で比与子。あ、今、奥から中年の男女と、高校生くらいの男の子が出てきましたね。あれは、八田氏の妹の三毛子と、そのご主人の田川羊一氏です。この屋敷に住んでいるんですね。そして男の子は二人の子供で犬一」

警部はこの家の事情に詳しくかった。さすがは警察官、というべきか、それとも単に好奇心が強い性格だということなのか。

「それですね、次は客ですね。まずあの、紺の着物を着

てきたない袴をつけている人物」

そういう人物がいた。昔の書生のような格好をして、下駄ばきでうろうろ歩きまわっている。時々、乱れきった髪をガシガシとかきむしったりする。

「彼は、金野大地という素人探偵です。どんな実績をあげている探偵なのかは私も知りません」

「その近くに、ほら白い布包みを膝にかかえてすわっている年取った外人がいます」

「あの人は知りません。あの包みは何なんでしょうね。ちようど葬式で骨壺を入れる箱のような大きさですが、やけに大事そうに抱えている」

「では、右のほうに二人くっついていっている男性は」

「あれは、久院氏と蓮氏です。二人で一組の探偵というところらしい。そしてその横は、あれつ、あの婆さんまで来ているのか」

「よく知った人なんですか」

「ええ。警視庁の近くの定食屋の婆さんで、麻古みず、という人です。自分のことを名探偵だと思ひこんでいて、よく我々がその店で昼食をとっていると、その時その時の事件について、とんでもない推理を語ってくれる婆さんでして、もてあましているんですね。あの婆さんまで招待されるようでは、今日のメンバーの質がほぼ想像できますね」

「では、あそこの老人は」

「ああ、部屋の隅に腰かけている老人がいますね。あれは隅野老人です。非常に無口な人で、ああやってただ、ひとの話を聞いているだけなんですよ」

そんなことで名探偵としての推理ができるんだらうか、と思うが、そっちの方面には詳しくないのでよくわからない。

「おや、彼も来ているのか。ほら、テーブルの手前に、カントリー風のジャケットを着た外人がいるでしょう。彼とは少々面識がありますから紹介してあげましょう」

大野木はなぜかいたずらっぽい笑いを薄く顔に浮かべてそう言った。

「私、英語が苦手ですから」

「いえ、彼は日本語ペラペラです」

というわけで、二人はその、やけに神経が細かそうな長い顔の外人に近寄っていった。

「今晚は、お久しぶりですね」

「やあ、大野木さん。この前会った時より白毛が増えましてな」

「あなたに、この人を紹介しましょう。こちらは……」

「待って。当ててみましょう」

外人は自信たっぷりの顔をして言った。

「名前はトモダ・タロウ。商社マンで、つい先日コンピュータの売りこみでアメリカへ行ったばかりです。だがそこで、腹の病氣、そう。虫垂炎にかかり、手術を受けた。趣味はトロンボーンを吹くことで、大学時代の仲間と素人バンドを作っていて、四日前にコンサートを開いたばかりだ。愛読書はミヤモトムサシ」

大野木は大いに驚いたような顔をして、

「どうしてそんなことがわかるんです」

「推理ですよ。簡単な推理を試みただけのことです。ねえ、トモダさん」

名前はもちろん、職業も趣味も愛読書もまるで違っていることを言われて、神童天才としてはニコニコ笑っている以外にすることがなかった。

3

田川羊一の一家がその外人に近づいて、英語で話しはじめたので、神童はその場から離れた。今日の主人公である虎造の妹婿にあたる田川は慣れた調子で英語を使い、その息子の犬一までもが臆することなく流暢な英語を喋った。それを見た大野木が、小声で教えてくれる。

「田川羊一は国際弁護士で、長くアメリカで生活していた